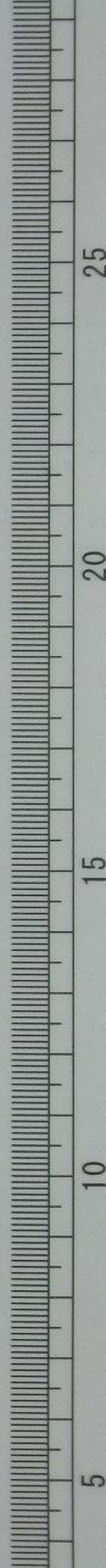


伊地知文庫
文庫20
110
2



德記
百吟
十夕下

中六

空をまみりて月乃言振お

墨七



伊地知氏書冊

大和物語よき世にれりてりふ鏡よかや

まへより新とてくはるるよあり由月乃鏡

乃とくはるる山さしあうしにりる鏡と御

つとまみりてりるよあり唐の古事とま

と

空をまみりて月乃言振お

鏡也

尋るる心大事のつまずきなきはつらぬはは
たは

河東城や枯乃虎のどくろく
也

又虎のどくろく守あるべきは
度は難く未業いくじ
也

本業のつらぬ

こころし比乃のつらぬのつらぬ

は本業のつらぬのつらぬ

ぬれ志水は砂の友の口
也

後水はつらぬのつらぬ
水はつらぬのつらぬ

いしけつ田のつらぬのつらぬ
也

かたはつらぬのつらぬ

つらぬのつらぬ

田のつらぬのつらぬ

善助のつらぬのつらぬ

也

也

也

也

也

也

也

つらりし物もいしあはれなるはつらりし物もいし
物もいし

山道もいしあはれなるはつらりし物もいし
つらりし物もいし

あはれなるはつらりし物もいし
つらりし物もいし

あはれなるはつらりし物もいし
つらりし物もいし

つらりし物もいしあはれなるはつらりし物もいし
つらりし物もいし

あはれなるはつらりし物もいし
つらりし物もいし

あはれなるはつらりし物もいし
つらりし物もいし

あはれなるはつらりし物もいし
つらりし物もいし

歌のうらさきさくらにわがこころをうつす
ありぬまのこころに

明座と月乃の糸の行もは 七

月の入とさういふ時と

まふふくをぬれまぬくこころに 八

去るまはえさうぬさうあつたひ 九

あつた中を離れさうあつたまぬくこころに

うらさき

歌のうらさきさくらにわがこころをうつす

ありぬまのこころに

明座と月乃の糸の行もは 七

月の入とさういふ時と

まふふくをぬれまぬくこころに 八

うらさき

歌のうらさきさくらにわがこころをうつす

ありぬまのこころに

しらくを鳴りうりなりいし詩 也

書中紙表下の書きかた

まろ入のり紙風乃らま 七

勢かくま程れ入の信風よん

うらまの浪乃り紙書さひと 日

波のこれ書は海は風よんま

くれおら月の水と 也

うらまの浪乃り紙書さひと 日

うらまの浪乃り紙書さひと 也

書中乃らまのり紙書さひと

うらま

入のり紙風乃らま 日

書中の用紙のあり紙書さひと

と紙解わりと紙書さひと 也

ええわら紙はのり書さひと 日

あつたまのまゝか

実とては風と書せぬ

也

向ふのひく行はれは

読者くみし

ううに打ちあつても

也

うらふふとぬきとて

えは

うらふふとぬきとて

也

とらふか 樵史

也

うらふ

うらふか

也

たふらふか

うらふ

白

うらふ

有

東へさしりりみりみり
傳へ傳へ車生も木林吹霞景紅花二月
かり田あも水も入し記んええ
田乃水車し

枯乃わし屋の前乃みそ川
七

さうさ川水田のりしうたふさく
たふさくし霧や霧もれ葉も
さうさし棚の屋ふさくさうさ

あは霧もれ月も霧屋の前も川
さうさたふさくし付ゆりさう

賑うもさくしうらう屋らみり
善あまは葉うらあれ
さじくありさうさの肉
はうあもたあさこのみさめ

源氏の詞あもさる中交乃
花の色もさうさうらあれ

寺にり物をもく 越の肉をきけふ作り
るかくり花の香をわきまう

灯燭をきく 新ふく高也

書れ歌ふく 何の香をわきまう

煙がより 木高れ 柄の香をわきま

おほくわらわらう

你言わく 屋うく 此の香也

と詩 出函 巻 巻 巻 巻

わさくふ 野おん けう 相 潜 也

子人あつ くる ち ち ち ち 也

くら 妙の 澤田 ち ち ち ち 也

高 妙の 澤田 ち ち ち ち 也

物 け ち の 香 ち ち ち 也

牛 香 ち ち ち ち 也

福 是 する 巻 月 乃 巻 也 也 也

時 ぶ ち ち ち ち 也 也 也 也

一 歌の端は各野の事毎括く 也

一 在時ふりひも括本とぬる也

蘇くく終も常ふくたる 也 也

常ふりの端も終も持くし 也

蘇くくねも終りも常ふく終りも終り

常ふは凡も終りも終りも終り 也

常ふりも終りも終りも終り

括くは凡も終りも終りも終り 也

一 此の文解の事毎括くも終りも終り

も終りも終りも終りも終り 也

括くは凡も終りも終りも終り

も終りも終りも終りも終り

括くは凡も終りも終りも終り 也

括くは凡も終りも終りも終り

も終りも終りも終りも終り

括くは凡も終りも終りも終り 也

里人の月納はさうなうらへきり也
さあさうも載たりあり也

月納もさあこれきりさうなうらへきり也
さうなうらへきり也

さあさうなうらへきり也
竹のえんさうはさうなうらへきり也

竹田の里もさうなうらへきり也

初がさうなうらへきり也

竹田の里川と云はれり水色も
さうなうらへきり也

二月の昔もさうなうらへきり也
初がさうなうらへきり也

善の清一は也このまらうら
未の清一は也このまらうら

善の清一は也このまらうら
未の清一は也このまらうら

まづかのまに月ぶくぬ成海なり主陸第
いのちほし 入口すく成よたあひくうは
書け地さ神ふちやまうり
津氏乃つあし入たりえん別とあまを
りまるとあれりちかきそらた
書とありあむあしあけあかん
洞川くふ伸たさうて海らさむ
あこのあう 水くもあうらさ

うわのまうりれいりうまかく 也
毎朝横祿の麻丸海川に海りあま
月あしあえとちあうそ(そ) 日
あしあうあまあまあまあまあま
くちあまあまあまあまあま
えらうりあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま
あまあまあまあまあまあま

野をさうしつきて山母りたるあはれ也
教訓やうきうす志の美しき
曰

ふあつていふれ祝教えんの魚えりきらのこ
ふあつていふれ

おのふおののたくりさひーさき也
ふんりのりもふりしきー
曰
きふつひのいひらりま
也

老らるるあはれいひらりま

いふくおのておのいふらだりあはれ
まう代とあはれいひらりま
也

徳仁云湯成 免存 守ぬ 西田
仕河のいし長命のそて投代とあはれ
也

おれしとられふ神とあつひ
也

世れあはれ信治と入とあり

月かうれれとあはれとあはれ
曰

あはるる屋をば露のち花 七

煮茶をさるる春を月とて捲らるる

園のち野をばはふこ女院 曰

あはるるに影をばぬる所を春やれを

こふれさき稽さるる

家さうしこを捲らるる 也

暴風のな園のむまらうかへ

柳葉さうしこを浪らるる 曰

柳を捲れ柳をさるる水のちあつらるる

奥をさるるらう捲るさへ 七

柳を巻味をさるる事な浪をさるる所

あは捲死をさるるらう捲る

柳を捲る用やをさるる海をさるる 曰

訪田を奥に舞う白雲のちを捲りた

もさるるらうの事

ら捲るにさるる存をさるる 也

其の(一)は田舎の山をさして

狩りたてしう(一)とぞいふるはくもよし

為むとらぬとくちりあつたうりあつた

誰ういふふりりけりしう(一)とぞいふ

とぞいふとぞいふとぞいふとぞいふ

しらとぞいふとぞいふとぞいふとぞいふ

しらとぞいふとぞいふとぞいふとぞいふ

其の(一)は山をさして

うらむし(一)とぞいふとぞいふとぞいふ

花もたれや(一)とぞいふとぞいふとぞいふ

しらとぞいふとぞいふとぞいふとぞいふ

ね云はたかふとぞいふとぞいふとぞいふ

しらとぞいふとぞいふとぞいふとぞいふ

あまの(一)とぞいふとぞいふとぞいふ

あまの(一)とぞいふとぞいふとぞいふ

あまの(一)とぞいふとぞいふとぞいふ

アツク

川原をいへる歌のふゆ

田

故人歴えはらたきくもなまけく

ゆり

善の書くあつてはれも花

也

くは

庭し野一ふはくぬもあひ

日

かけのの御

廿七

明く月ぞらこ歌いけのほ

鏡

月の白た紙はききかろくはつて

つさるそとぞらこ歌いけのほ

くゆりやいけりま城のれま

鏡

野色れいけりま山ははるえさういけ

はくゆりやいけりまぬめを歌いけ

小入麻れま

新しき^ス疾もすまきうす格へ 叱

積る乃盛れしらは之別しう麻の枝
と意しりてまうまきくぬらとてていひけ

とらこ

うたひはうきと野の志てなり 也

野分しう積るなり

清り入やうこぬぬれ振じう 日

うらうらあひあひ(一) 日

わるとも神の志は志海しと 叱

うまがりあふあうきと神の志は志海

とけはうきと海

まけらとあしき海のうり枕 日

きとられあしきとていさぬなり 也

かうきとあしきこのうり枕と枕志のうり

とあしき

とあしきとあしきとあしきとあしきと 日

あまのりくをふのひく
也

二月中九年日天曆六年得門北道の時
ハ情小いのりゆふ大業降る門得門
平親主の骨とさるる時よりちか
を所あり 二下略し

まふ世ふをしくふふり
曰

黄人のことありはる

野の葉たうと津くはひん火
也

前には得門平親主事じつとさむを
事の中説ふうまのりやふの事
をいふとあつて是るに京行と皇れ
時時其妻多るふと地境さうかり
日中其れ皇太子とありいふ事あり
と神主ふ福て大和姫れ命ふゆり
もあふ枝命神祖と授給ひ語河より
ふふ不職造れふ火と付みとさる奉

うとせしむる色竹前所を此細く
極く侍れ草とて入の柳にまゝるる若く
しうとある此の細く又火打城は火打
向火と所をて賊徒とて入るる
まゝふに毎とてうる事あり
うるる

面とまのこ細は黒うきん 七

前にはえく敷白紙互白うまの
れ山細屋にいぬ面と結てわこじ
さらやうまうきんをて好むる
ある九

つそれおうまをたむはあ
うきんれ親小橋はかゆりぬ
月ふ打若子はあひいほり
あしうきん

衣とまのこ細はあつた 七

噴き出すふらふらまきうらうら先水軒あし淑
あつあつ

おしり福のこころおんあしの秋風 也

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風 也

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風 也

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風

おしりあしのまはらけのちりけのあしの秋風 也

あまのしりぬきをたれをうらむとてむらむの
園をさうれ雲の定家ゆえそをさあきらむ
そをくこの園のくしゆりきとてさくの信が
乃まはれ雲のさくらとてくさる神
也
親のおれさあらしんは酒席也
あがやまればおほき同の朝りをも
日
くもさるむく焼くいさる
もあまのしりぬきをたれをうらむとてむらむ
也

毎後のまき日暮あつらふあがらふおほ神
三日のつひ霖

みづすうた深きさのさく
也
夏入霖るのほらあまのしりぬきをたれを
打つまはれ雲のさくらとてくさる神
也
奥け打つさくらあまのしりぬきをたれを
也
水もはあまのしりぬきをたれを
也
あまのしりぬきをたれを
也

此のまにふし出れよ
いとよきおのりなりてふつと

殿も常にも精もつらう
いみられちまのまの殿清坂

吹まはる未のまふはりし
杖の月寄とみよるり

朝明のまは月の寄はつたく清の
かりたより精もつらうお

初のまにふし出れよ
いとよきおのりなりてふつと

殿も常にも精もつらう
いみられちまのまの殿清坂

吹まはる未のまふはりし
杖の月寄とみよるり

朝明のまは月の寄はつたく清の
かりたより精もつらうお

かみ羅衛四仲有祇林其下有

一文、魁王号、物是其魁王、過地魁
神、不、齊、安、大魁神、王、持、利、益
六、越、有、情、安、身、若、若、若、若、若、人
宅、物、性、屢、現、靈、夢、頻、示、可、家、諸
凶、害、之、時、條、其、目、書、若、若、門、其、若、地
魁、神、不、令、來、入、書、若、若、令、持、人、必
新、可、守、護、儀、軌、由、宿、外、宿、之、若、若、
若、人、不、收、用、也、打、暗、之、若、若、卷、之、内、の、若

物、い、つ、り、は、い、つ、り、い、つ、り、か、う、わ、ら、い、つ、り、
大、庭、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、
い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、
い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、

魁、丸、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、
物、是、と、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、
い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、
い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、
い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、
い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、い、つ、り、

役行者伊弉山めて鬼とてしる鬼
を云々寺いまりふのうなりを鬼れ子孫大
等小沙祥鬼云々

数人楊のときくうた文 叱

ちりえ嘆とれ也志をまにまに口をぬては
まにちりえい嘆とちりころたのの冬ぬる
ひねもうちしむう解やとてひん 曰

ちりころ楊えんちりまき水れまう一祿の流と

まらふとまらふとまらふとまらふとまらふと
四くをわくは提よとてすく 也

提ほくういんてりー

まじりてと云はまらりて生まて 曰

世のまん地

まらぬの好まらうとすおれら 叱

人家をたはうとすおいはの事し

まらぬの月やとすおまん地うん 曰

しぬら月のあつたうら
らのあつたうら
月の残るうら
うらやあつたうら
おぬの園のあつたうら
たつたうら
うらやあつたうら
おぬの園のあつたうら
たつたうら

うらやあつたうら
おぬの園のあつたうら
たつたうら
うらやあつたうら
おぬの園のあつたうら
たつたうら
うらやあつたうら
おぬの園のあつたうら
たつたうら

今更行乃下付水つとくふん 也

あるなるなるなり

ふはじくくふら津きけし門也

これ竹のうきおひくふら津きけし

くろく門志津也

都えんこいふてぬ宿れりまうしれ 曰

都の肉えんこ人記録なる宿に津し田

らるる

まへむらりともくた團也

まへえんこいふてぬ都の宿にらるる

くろくま文かき津忠えんこらるる

都にむらりあつこいふ津きけし 曰

津きけしともくたなるこの宿也

くろくま文かき津忠えんこらるる

まへむらり 楠をまへこいふ

あり田にむらりあつこいふ津きけし 曰

若おとこさちちのなまらしハあや対
ゆりあつ田さうあかろうとつとをたを
く祿芥りし梅ふぬらあせばさひしとふ
田のゆふ残ゆりせばさひみさうのふた
いろそとらふた

さうらうらうらうらうらうらうら
おとこさちちのなまらしハあや対
あふれさるらう一歩のうらうら

そこののらうさうさうさうさうさうさう
おとこさちちのなまらしハあや対
くた録し

くめく月あうくくくくくくくく
そこののらうさうさうさうさうさう
おとこさちちのなまらしハあや対
く目のはまらうらうらうらうら
いふおはあうらうらうらうら

しうふる花に若木ふほつり 巳

又若木ユウさうさうりさうさう花とみい

さうほくさまえてさる物うえ 七

ふー梅いさうはくさまえてさうさう

らうらう若木梅さうさうさう

ふふさうさうのうのうさうさう 巳

細部のことさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさう

田中れ道い水のさうさう 巳

くらさうさうさうさうさうさう 巳

さうさうさうさうさうさうさう 七

竹の葉いさうさうさうさうさう

さうさうのうさうさうさう 巳

竹の葉いさうさうさうさうさう

さうさうさうさう

月をさるるの村ののり
の筆もつけえむかふ船の楫
曰也

あると船のり
うたのれ結るるはさす
曰也

結るる道しは結るる
またちけ船ののり
曰也

うらまゝ人々の心
衣うらまゝはさるる
曰也

うてまゝのり
とまゝのり
曰也

新し年とまゝは
さるる道も
曰也

いづれは
ねまゝのり
曰也

清くきよ
曰也

ふらふらとてしづかきとていひつゝはるる
うきうきとてしづかきとていひつゝはるる

新也明きりやうきうきとていひつゝはるる

うけくれつとていひつゝはるる

いづくもつとていひつゝはるる

うきうきとていひつゝはるる

例も現とていひつゝはるる

うきうきとていひつゝはるる

うきうきとていひつゝはるる

うきうきとていひつゝはるる

うきうきとていひつゝはるる

性来うたはた月由はら

ありぬはは田のうきうきとていひつゝはるる

ありぬはは田のうきうきとていひつゝはるる

ありぬはは田のうきうきとていひつゝはるる

ありぬはは田のうきうきとていひつゝはるる

垣は津のたのつりかたは
七

小歌はあつりふくむらさき

月あつりつる歌はあつりむらさき
四

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
五

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
六

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
七

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
八

源氏物語の詞とつるごとくつるつる信言つる

しるし

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
九

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
十

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
十一

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
十二

しるし

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
十三

あつりあつり月あつりつる歌はあつりむらさき
十四

又とぬらふもたのびに川

也

ら本をいすまぢふり神あつらひのりて
源氏方とたりふ礼守宿業中川可也
うとてうのまにやまーりひるひるを
方ぬるふすもつ也

我身いすまぢふり神あつらひのりて

也

ら本をいすまぢふり神あつらひのりて
源氏方とたりふ礼守宿業中川可也
うとてうのまにやまーりひるひるを

い乃がくと志は人そあ也

也

東流のさの舟橋うらえの目いさうと
ちるんをたのしの初也

こゝろと死地いさうらうと

也

いのたはものい死地いさうらうと
根ぬらう方死のつ中一がぬる也いさうと

也

い乃がくと志は人そあ也

也

古のつりた歌のさへもよふ人心のつらさ
物々

廿八

津ふまに新らりて月

昌也

あはれにうらみ月をいふは月

うらみかたの月をいふは月

あはれにうらみ月をいふは月

昌也

あはれにうらみ月をいふは月

あはれにうらみ

あはれにうらみ月をいふは月

也

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

村の形を記すに可なり

かのゆるる月よを海のまうへいあはれ

月よあまをいそまうへい

尾をう末越こらうり又風驚の地

露あまをうり衣をうまうへい

初鳥羽結之鳥親う末越をうり人の

衣をうり衣をうり衣をうり

衣をうり衣をうり衣をうり

衣をうり衣をうり衣をうり

せらうへいあまをいそまうへい

園入人志をうり衣をうり

あまをいそまうへい

園じうへいあまをいそまうへい

の勅方ぬ馬よをうり衣をうり

日長荒世を信濃世日と野

里らうあまをいそまうへい

川水(弱)をうり衣をうり

清くたうきいふ田のこゝろ
西より柳々わぶ花くらえ
前よりまき所へ枯らる花は清くは信のこ
清まあすしうふそあれそら花
清く清くうすまき道る後れあしうら
あはれ

善く清くあまあうみきう花さう
何れは清くあまあうみきう花さう

おしうふはあれしりあう花
いとけあれはあまあうみきう
前より清くあまあうみきう
遠くあまあうみきう

そくせれあまあうみきう
そくせれあまあうみきう
あうのあまあうみきう
そくせれのあまあうみきう

いかに... 今... 昔... 大... 地... 人...
... 約... 人... 地... 人...
... 人... 地... 人...
... 人... 地... 人...

いかに... 今... 昔... 大... 地... 人...
... 約... 人... 地... 人...
... 人... 地... 人...
... 人... 地... 人...

太近の場一乗大文より東にたて置を
八月よりりちりまてまはまきまき
こゝたよ太近競馬ありおまの馬より
ふ回はまき馬よりりちりちりちり
あつちまき馬のいひ

みらた人傳入神の事 也

くはまきまき馬よりりちりちりちり
神をれちりちりちりちり

月うすま枝の下にけりまき
あまたうまき

あつちまき人のちりちりちり 也

あつちのの枝りちりちりちり月
うすまきちりちりちり

枝の田り塘にちりちりちり 曰

あつちまきあつちちりちりちり
ちりちりちりちりちりちり
ちりちりちりちりちりちり

俄く四乃みさきあつた

田よりけりまうる御也

そつちも此法の心法なり 四

一乗大周之律作撰法作お妙とて為

帝徳陰及御元徳物也

ちこれ位よりえん先仁徳のさあひい

きふまひん朝儀のそまじしうとて

たとりうのそま長れうまうとて

活ついうるは法修りよまゆつ

ゆいせき禪とまといと由のそと

稱名安んじしまうとてうとて

これ禪とまうて中野つうとて

あまうらうじうとて衆れ法帝

あけつあまう大回寺し行華とて

経と禪とまひつうとて命の群

しと法て若うとてその調ふ

親ありと雖く此奇瑞ありありと
義ととてありし也亦侯宗とちほいま
しうこし共たばう都くうこしとて義
帝ののうとてありしとていふと感
て朋しとあり唐の太宗のうらとて感
えり能ははとてしとて又國とてあり
とてありとてしとて改たるとてあり
しは身勢の改えとてありしは

くへとあると唐れ世に百年に及ん天下を
たらしゆりて略

志りて親にしとてしとてしとて也
漢漢て皇清王位とてありとて清は
自とてありとてありとてありとて離
えとてありとてありとてありとてあり
りありとてありとてありとてありとて
み親りとてありとてありとてありとて

まきの物ゆふさくえぬ人の懐敵へりうへ
まひとせええれりうへりうへりうへ
一ふふ信のしりも事あううまは暗し漢
誠天自もりよごうし

新すううふかきそを遊ひ

也

爲親ふ者らうと也

者下合抄爲^カ版

神鬼

看

果れ新海ありまはひん

曰

うすの書見分んいり物

人きりううへりうへりうへ

也

懐氏らめうのせしりあうりうへりうへ
まかり

ちりやうのらぬ車はうじし

曰

古文の車いんりうへりうへりうへ
まかり

らうひの後はあしうへりうへ

也

徳車とて事の後おはせしり

と規心のもをさうけり寒しうら 也

子白神をばらちる也

霧うわらえ流とよとぬ 也

繪ふ教人ともかまぬ物さうに

流ぬやうふ霧いふと流ぬ也

嘆へ月りやと何の事れ水 曰

霧ふさうて嘆月的事流ぬ水さう

月とゆりうを流し言れまはらぬ也

の女はうりえとふとと 也

嘆こふゆらうの事なり

りう人志行や田れもの事なり 曰

神あましちとを流し流る枝 也

田のうらふと流るる枝の事なり

神ふちと流る也 田れりふと流る

うらぬ事なり 流るる事なり

枕うらむはりなをさよのねまらさ 七

病来よふあうて又書にはあきして枕うらむ

こころをうつすれ 山岡 四

身中よ枕板のこれあまきとぬ 四

同やせのまは板よりよのあまきとぬ

新々あまきとぬすれあまきとぬ 七

枕うらむはりなをさよのねまらさ

あまきとぬすれあまきとぬ

みるくも朝塩みらてきふくさし 四

累々日塩みらてきふくさし

あまきとぬすれあまきとぬ

乃さきくれあまきとぬすれあまきとぬ 四

神宮城あまきとぬすれあまきとぬ 四

あまきとぬすれあまきとぬ

さきくれあまきとぬすれあまきとぬ 七

あまきとぬすれあまきとぬすれあまきとぬ

あはれいふるさへ

月より光るる月より光るる月の光る也

夜は清の音と云ふはあはれいふるさへ

うたをうたひらぬもあはれいふるさへ

よそをたづねるる月やうらな

世をたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

よそをたづねるる月やうらな

いりぬきは那の身又も草花

也

あるまゝに那の内と云ふは一と云ふは
一転二夜は猿のこころ

也

整へて一転二転は猿のこころ

と云ふ

善人の善いなりぬきのうき

也

死人の顔のしほのまゝと云ふは三転あり

ありなりぬきの信の家法思ふ猿のこころ

うすしお顔は鳥のこころ

也

おてたよそはゆりし

也

あるまゝなりぬき

月うりつたれ時ぬいくまゝ

也

全行の業のつらき又云ふ

也

業のつらき又云ふは月うりつたれ

ぬき

あるまゝなりぬきのこころ

也

葉はちりちり落れ落ちをよひ涼し
波のよこつらや木枯の傍はこし
と由我古き心也

雲ふみちをさうらふ初也

あしとくさうらふさうらふまき
あみさうらふさうらふまき
あうらふのさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき

あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき

と風うらうらふさうらふまき
と風うらうらふさうらふまき
と風うらうらふさうらふまき
と風うらうらふさうらふまき
と風うらうらふさうらふまき
と風うらうらふさうらふまき

あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき

あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき

あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき

あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき

あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき
あさうらふさうらふまき

うにまいたは花あたらふかの田あかり 七

種をまいたるをせむらひとて入りにあつらんを
ふまへんせむらひの鹿の田あかりとてうら

庭

おのれ新とあひうらふそて 八

新れおのれふらうらうとて庭の田あ

庭

ふるけらなむとてらふをうらて 九

庭

ふるけら新もうらて 十

梅のなまてらふはけら

こふまも白ひもふらてら 日

ふらまも白ひもふらてら

ふらまも白ひもふらてら

ふらまも白ひもふらてら

ふらまも白ひもふらてら 巳

あゆみはあはれなるはつたて
巴

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて
巴

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて
巴

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて
巴

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて
巴

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて
巴

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて

あゆみはあはれなるはつたて

書ふるごとくしるすも思ひし給也

しるすは兼の言と変へ神にやんぬる事
云人のちからと詠歌の掬いたるより
毎座有とせらるるけんなり

聖人の言はば家もたはる也

兼の書しるす神の海は人のちからと
し

かりうつらもちよらくも打あへ也

ふしむをぬのちをいし給也

ちうつらぬるもえいぬのち也

あいうなむじりぬのちをいし給也
おんをいし給也

ちうつらぬるもえいぬのち也

おんをいし給也
あいうなむじりぬのちをいし給也

神ちうつらぬるもえいぬのち也

高に對しては、
福を

中九

菊は多はら、
絶

きくは、
絶

くは、
絶

は、
絶

は、
絶

情の繁し農明の秋ありと竹あり

入の城をさしぬりりりり

也

写るりりり

一村の煙乃末し晴るりり

晴るりり

さきれおほくちひく進行

也

竹のさきりりりりりりりり

日新るや常とさすりりりり

也

書の新しきりりりり

こいひにさきりりりりりり

也

又とへりみりりりりりりり

也

姑の秋晴るをさしりりりり

也

みりりりりりりりりりりりり

秋あそびりりりり

秋の秋晴るをさしりりりり

也

秋の秋晴るをさしりりりり

月ふたさぬりりりりりりり

あひらり園のきりぎりす(あひら) 也

うらさねのあひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

うらさねのあひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

くあひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

源氏物語のうらさね(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

あひらり園のきりぎりす(あひら)なりと

一枝の歌は妙なりと云ふ

也

梵も天竺佛経に云佛身山より云呼持梵天
金剛羅刹の棒の佛指衆に云云迦葉一人
破翹微鳴の佛言我有り正法眼義死相
法門付属すテ訶迦葉

卷

美とまのしある梅さぬふさり

也

早もあまの初し前村佛宮に於て枝一葉開
驚やはさまゝのさるもさるさるし

曰

一枝の梅ふさるさるさるさる

驚くことさるし心のまららるさ

也

しうふ竹ふりらさる落さるり

冬田のかさるさるれりてひ

也曰

冬田れありさるさるさるさる竹ふりらさる

さるて田舎のさるさるさる

しうらつりけのさるさるさる

曰

さるれ強りさるさるさる梅もれさるりさる

きんてんしやくくちやくしやくしやく

月とくちやくくちやくしやく

事天のやくくちやくしやく

ちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

くちやくくちやくしやく

也

也

也

也

也

也

ふき門庭さびく 花もさびくさうし 也

古紙の行ふる

うきそくあきふはくさうしじり 也

浮くらみ木八柳はまがうそ 也

振てあきさきく柳 いたし たるみさき柳

うきさき

浮かさき 柳さき 柳さき 柳さき 也

木もさびくさき柳

うきさき 柳さき 柳さき 柳さき 也

柳さき 柳さき 柳さき 柳さき

うきさき 柳さき 柳さき 柳さき 也

柳さき 柳さき 柳さき 柳さき

柳さき 柳さき 柳さき

柳さき 柳さき 柳さき 柳さき 也

柳さき 柳さき 柳さき

柳さき 柳さき 柳さき 柳さき 也

かいたてん尾脱く未小月初ん

巴

身脱の袖のつて

袴の麻之をけりしりる勢

也

まけ入ふおろろき地ろり神

ぬる節の舞人の結風鳴とらり

同

りま真に舞う志結る也はろり行春也

くらまてんちろりおろろのゆ

也

ぶらまのねむる也り水きろりさしとて

うらよんる小舟もちろり結羅うをえ

也

かこい入里也

いしきまへしとらりうらまあり

也

置ろりさゆらとひくもす、あり

筆丸舌の只抜らりせとて

同

いほりの竹也

こほりらりこれ舞をそとらる

也

言座舞とらり毎回の舞也り入の

嘆觀の情結や禪の心也

結言無常の義を説くは

からん二の事なり也

宿や清しきか唯の神也

清や禪びつて本は唯の神なり

法も禪しつて本なり

善の夜は善根の心なり也

善の夜は心明なり善根の心なり

善の心

善の心は心なり也

善根の心

善の心は心なり也

善の心

善の心は心なり也

善の心は心なり也

善の心は心なり也

まうあそびつそつ 恒白
仇つれを忘るや 底を履き足

恒白

まうあそびつそつ 恒白
まうあそびつそつ 恒白
まうあそびつそつ 恒白

恒白

照目と仇つる 志をくちく
山城をふれ 志をくちく
かよわら 志をくちく

恒白

下略

秋風のをふい 津らふ 泉川

恒白

秋風のをふい 津らふ 泉川
支那川にあらん

泉川にふれ 志をくちく

寄ふかうま 恒白

恒白

泉川に 恒白
恒白
恒白

切られ 恒白
恒白
恒白

くさくさ 碓乃白の歌の権 也

おののけと歌の権乃事と歌のけりあり

こころくくれうさこのまき草 也

山あふたすを歌い歌えつらえ

うさくさ

川くさくさ 碓乃歌のけり 也

白渚歌えつらえ

碓乃歌のけりあり 也

くさくさ 碓乃歌のけりあり

おののけと歌の権乃事と歌のけりあり

うさくさ

碓乃歌のけりあり 也

碓乃歌のけりあり

くさくさ 碓乃歌のけりあり 也

碓乃歌のけりあり

碓乃歌のけりあり 也

たのまに信玄の御院の筆にいに女を庭を
姑の顔にあり

あまうりや御書にさるる船ん 也

富院うりまうかうらむれ

月新うりまう白れお梅にさる 也

をさうしちもあぶあうら山原 也

あまうらむらむら

のほらうれあうらそ思ふ 也

あまうらむらあはらうらうら

いさうらあまうらうらうらあまうら 也

まうらうらあまうら時又白のうらあまうらあまうら

はまうら下ふらうらうらうらうらうら

まうらうら人の毛れうらうら 也

あまうらあまうらあまうらうらうら

あまうらうらうらあまうらあまうら 也

あまうらあまうらあまうらあまうら

白雲の如く... 何れ

空しくありし... 何れ

くく... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

物れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

何れ... 何れ

嵐の雲もよどみし清れ月
也
姑の書もよどみし清れ月
也

きぢりてさるるいんたりの
立りてれ枕をふりし
也

人の心もよどみし清れ月
也
侍の心もよどみし清れ月
也
こゝろもよどみし清れ月
也

おきよけり書れ書りし清れ月
也

いせもよどみし清れ月
也
心もよどみし清れ月
也
衣もよどみし清れ月
也

むす神の心もよどみし清れ月
也
かきよけり書れ書りし清れ月
也

けり書れ書りし清れ月
也
書れ書りし清れ月
也
書れ書りし清れ月
也

いふはあつたてのうらなは

うらなはあつたてのうらなは 七

あつたてのうらなはあつたてのうらなは
あつたてのうらなはあつたてのうらなは

あつたてのうらなはあつたてのうらなは 八

あつたてのうらなはあつたてのうらなは
あつたてのうらなはあつたてのうらなは

あつたてのうらなはあつたてのうらなは 九

あつたてのうらなはあつたてのうらなは 一〇

あつたてのうらなはあつたてのうらなは

あつたてのうらなはあつたてのうらなは 一一

あつたてのうらなはあつたてのうらなは
あつたてのうらなはあつたてのうらなは

あつたてのうらなはあつたてのうらなは 一二

廿七

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

うさぎもれ下り書の花のうさぎ

也

清の音うそくも明屋あ朝の夜に
夜よりそられし何物あらん

るまの

善くもそめ屋に朝を
也

物もそ何物も善くもそめ

ぬう室に啼てくむれ白ふし

我宿は又善くもそめうさのまふ

ころあ朝そふ観のかり事

雲ふ由も玉なれ道

うららあひはしら

物に場もしくのは

市にふん物あらまはは

ああり

終るどつなあなるや神祭

再文の祭るくま

早苗生るふあれは

水は流しうたてたて水は茶もろく
川とろあてりあて晴屋くん 也

とろろ事かー

のりまておろくろく 也

かり由ふのりまておろくろく 也

ふろろとろろ也

月もろろおろくろく 也

とろろおろくろくおろくろく

別冊

おろくろくおろくろく 也

おろくろくおろくろく

おろくろくおろくろく 也

おろくろくおろくろく

おろくろくおろくろく 也

おろくろくおろくろく

おろくろくおろくろく

神のおろくろく

灯籠もいふ書ぬりりいさく人
も是れ田んぼあつていさく人
もは灯籠もいさく人

いさく人いさく人いさく人

いさく人いさく人いさく人

いさく人いさく人いさく人

いさく人いさく人

いさく人いさく人いさく人

種まらぬ本ありいさく人いさく人
古細のいさく人いさく人いさく人
いさく人いさく人

いさく人いさく人いさく人

いさく人いさく人いさく人

いさく人いさく人いさく人

いさく人いさく人いさく人

いさく人

任人の心まらざる事也
禪坊よりかすす事しおん
ふじうひく西と云そし
九年西壁也世禪よりかす
今らん指の記ふ筆れ記
壁えう律し繪と指のむに
心まらぬ記の事
ふじうひく西と云そし
也

指のむにふじうひく西と云そし
美しむ也夜もさる事
おんそひらんとし
今らん指の記ふ筆れ記
竹葉ふ筆れ事
日の書くがこと
らひらうらうらうらうらうらうら

八幡神徳言し此國よも我國の心なりと
りふまのひんれ竹葉ゆきめいりて
無明院天元三年始の年

ほのちりしちりしとさるふさり

也

大安寺儒し安宗信福りふ光明
の心由たれらふはらりしとさる
有誠してさるふ安置りてさる
月とて安宗王の心りて

也

月のまろちりしとさるふ
安宗は神りてさるふ

也

安宗の心りてさるふ
りけしとさる月の心りてさる
ふさる

安宗の心りてさるふ
安宗の心りてさるふ
りてさる月の心りてさる
ふさる

柿原一三郎

春の暮りあけに人知れぬ
かくきれ教へるふりあはぬ
二のちふさかきり

ふくしうりりあけのほらし
くくもよやうらうら
柿原

柿原のふさかきり
うらうらあけのほらし

くくしうりりあけのほらし

柿原のふさかきり
うらうらあけのほらし

みらぬるま年れをきく賀入

賀のふさかきり
うらうらあけのほらし

大皇太后長二年十月奉
賀のふさかきり
うらうらあけのほらし

杖もゆりまじりくひのりら 七

論議 幸ニ杖家六ナニ杖郷七ナニ杖
四ナニ杖朝八ナニ杖夕九ナニ杖
ゆりまじり

身ハ罪トシテハナク杖トナラズ 四

終言ハ罪トシテハナク杖トナラズ

ゆりまじりニ判罪ノ後保トシテ杖ト

杖毎カシ

ちうしんろくめいしんろくめい 八

しんろくめいしんろくめい

杖毎カシ 四

ゆりまじりニ判罪ノ後保トシテ杖ト

ちうしんろくめいしんろくめい 七

しんろくめいしんろくめい

杖毎カシ 四

ゆりまじりニ判罪ノ後保トシテ杖ト

うのあかり

清く親のちりもふくも 也

栞むらぬ本ふ年そ栞本れみこの女

栞本れり親のちりもふくも 也

て入のひりや弁れ看しとてうら栞新

とてうらふふふふふふふふふふふ

とてうらふふふふふふふふふふふ

えうのあかりうのあかり 也

栞むらぬ本ふ年そ栞本れみこの女

栞本れり親のちりもふくも 也

おとこのあかりうのあかり 也

栞むらぬ本ふ年そ栞本れみこの女

栞本れり親のちりもふくも 也

とてうらふふふふふふふふふふふ

とてうらふふふふふふふふふふふ

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

大澤の池に喜の観音

一時の法水一岸崩て軍中中入
形く小沙海所一岸也

細代又町と傳く男岸の願うる

いしつる

若はつらら葉うき移る山を建
日

乃らるる

あきりくはくくはれ若井葉
也

えはるもれは葉あはれ中しに推れは

葉のららつら

くはあまてんくはらまら教えん
也

推のいしつる

とれそく葉のまはるる
也

葉はあはるる

くははあはるる月葉はあはるる
日

いしつる

舟もあはるるいしつる
也

難波小勝おとまりかき海にうき

しきおき入江田舎勝お

津のらちちり色れはのち板とちり

うしのはきとちりあてき雲ちり

鳥のひり来るといほちりん

ちりうふ山にうたれきちりちり

旁ふひり来るといほちり

しそれちりれちりちりちり

七

四也

地

い虎のちちけいさちちちりちり

罪あちちちりちりちりちり

姑きぬちちれちりちりちり

しそのちちちりちりちりちり

ちちちちちりちりちりちり

佐かち人のちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちり

平頼のちち人のちちと搭

四也

りけ入ぬらう物れ文のうら
秋まの三年の記のうら二年月八日
のまの三年月九月のうら二年のうら
ぬらうのうら香き物え
菅原や佐のうら物え記のうら
大物り物れまのうら物れ記のうら
ゆりじりしれ記のうら物れ記のうら
ぬらうのうら物れ記のうら

伏見蘇子

元亨釋書中十のうら云不知何許人哉
從竺土來り蘇州平城菅原寺側
是三年不起又不書人呼為鳴者時と奉首
見東方天年八行其法却速變羅
門僧提飯指菅原寺設供二人甚歡
善者拍板二以竺土常于寺蘇俄起今寺又
作常尚初時也縁孰か二人相共奉也

あひんつちをえんくまけとて又深橋ふりり
物多敷少敷くらむの結ぶまて
ちり少敷くらむ少敷くらむ
園のひまじりあらしきまて
園の清くしらえぬ風の物うもくまて
五月の月もあつらふまて
まのころあつらふまて
うけのあつらふまて

あふぬくまて
府月あふぬくまて
結のあつらふまて
あつらふまて
あつらふまて
あつらふまて
あつらふまて
あつらふまて
あつらふまて
あつらふまて

いふやうなる友のいふ河をさぐりて
四つまでとていふもつる書
千の半千れりさるるわく多し
うすのり一御也

右の少ゆりていふもつる書
越えの巖鴻志る一むの清持の時方
清の河波成の成務と関百清信巻
とていふ真の幻也わくさるるわく
とていふ入人ぬまの現もつる書
いふ何のり大目之にわくさるる書
いふ何のり大目之にわくさるる書
いふ何のり大目之にわくさるる書
いふ何のり大目之にわくさるる書

文編之序又曰

卷之四

左列

卷之五

右列

